

「南陽アーティストフェスティバル」の中で「防災 BOSAI アート トークセッション」が開催されました（2023/10/7）

テーマ：防災とアート、未来に向けた社会づくり
会場：山形県 南陽市交流プラザ「葦楽（くらら）」

国内で自然災害など多くの災害が発生し、それに対する取組が行われている中、防災・減災に資する新しい取組として「防災 BOSAI アート」の可能性と役割についての基調講演とトークセッションが開催されました。基調講演の1件目は当研究所の今村文彦教授（津波工学研究分野）が、関東大震災や東日本大震災などを事例に、災害科学とアート、さらにはデザインとの融合の可能性について紹介しました。2件目としてロンドン大火をテーマに、ロンドンミュージアムのキュレーターMeriel Jeater（メリエール・ジャーター）氏が、博物館での取組を紹介する中で、アートと防災の関係を話しました。

そのあと行われたトークセッションでは、MCとして北村美和子特任研究員：助教（国際研究推進オフィス）、2名の基調講演者、そして奥山清行氏（KEN OKUYAMA DESIGN 代表取締役）が登壇し、防災アートが伝統的な防災教育とは異なる新しいアプローチを提供する重要なアイデアであることについて熱心に議論されました。防災アートは、芸術的な手法を駆使し、情報を感情や共感を通じて伝えることに焦点を当てています。具体的な事例として、イギリスでは防災アートが人々の心に訴えかけ、深い印象を残し、防災への意識を高める新しい視点として高く評価されています。さらに、このような活動を開始するには、アーティストやクリエイティブな人々を巻き込むことの重要性が強調されました。防災アートのイベントや展示を通じて、地域の人々に防災に関する新たなアプローチを提供できることから、地域社会での防災意識向上が促進される可能性があることや、災害の記憶を持続的に伝えるためには、アートを通じた防災学習の機会を提供し、地域の人々がアーティストと共に参加することにより、若い世代にも防災の重要性を伝えることが求められることについても話されました。さらに、「防災アート」の視点から復興や防災についての考えが共有され、未来に向けた社会づくり、まちづくり、都市づくり、環境づくりなどについても積極的に議論されました。

会場にはポスターやアート作品が展示され、当研究所からは保田真理プロジェクト講師（地震津波リスク評価（東京海上日動）寄附研究部門）による「結プロジェクト」や、震災伝承館の役割や効果、津波避難ビルへのアドバルーン活用の活動などがポスター展示されました。

このトークセッションは、防災アートの重要性と災害の記憶を継続させる社会的な役割について考える貴重な機会となりました。

文責・写真撮影：今村文彦（津波工学研究分野）、北村美和子（国際研究推進オフィス）、
保田真理（地震津波リスク評価（東京海上日動）寄附研究部門）

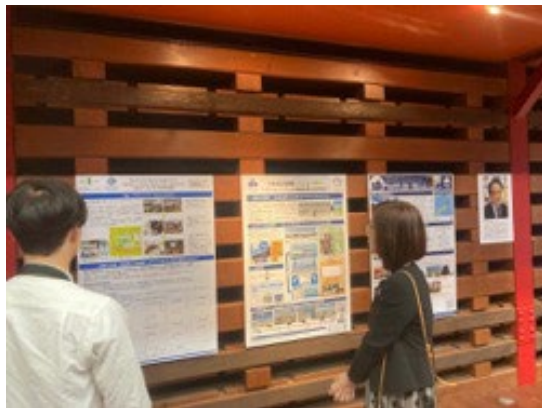
（次頁へつづく）



今村教授による基調講演の様子



トークセッションの様子



ポスター展示の様子



KEN OKUYAMA DESIGN の車展示の様子